



ヒューマンコミュニケーショングループ ニュースレター
 2010年度 No. 2
<http://www.ieice.org/hcg/jpn/>



— Contents —

- ◆ ヒューマンコミュニケーショングループ(HCG)シンポジウム2010 報告
- ◆ FIT2010/MVE企画の開催報告
- ◆ 発達障害支援研究会(ADD)活動報告

ヒューマンコミュニケーショングループ(HCG)シンポジウム2010 報告

HCGシンポジウム運営委員会副委員長
 亀田能成 (筑波大学)

電子情報通信学会ヒューマンコミュニケーショングループ(HCG)では、2008年度まで春の総合大会に連動する形で各年度の3月にHCGシンポジウムを開催してきたが、2009年度から時期を変えて開催している。2009年12月は札幌で開催し、2010年度は12月15日～17日に渡って宮崎県シーガイアで開催した。本稿では、盛会のうちに終了した本シンポジウムを紹介する。

HCGシンポジウムは、ヒューマンコミュニケーショングループに属する1種・2種研究会の研究交流を横断的かつ濃密に行うために、総合大会やFITとも異なり、研究会開催形式に近い形で発表が行われるのが特徴である。そのため、全ての発表申込が統一して取り扱われ、セッションは母体研究会ではなく、研究テーマごとに区切られている。オーラル発表には研究発表会と同程度の30分が割り当てられ、じっくり発表と議論ができるように配慮されている。ポスター形式のインタラクティブ発表もあり、一部のオーラル発表者らはインタラクティブ発表にも参加してさらに議論を深めることができる。2010年度は、宮崎県のシーガイアという快適な開催地ということもあり、オーラル発表58件、インタラクティブ発表12件が寄せられ、参加者は122名であった。

初日のインタラクティブ発表には、オーラル発表から11件が参加し、インタラクティブ会場全体では合計23件の発表が並び、盛況であった。この23件の中から、ベストプレゼンテーション賞1件と優秀プレゼンテーション賞2件が選出され、懇親会の席で表彰された。受賞者は以下の通りである。

ベストプレゼンテーション賞
 (A2-3) 主観的な好みに影響されたワーキングメモリの神経基盤
 川崎 真弘・山口 陽子 (理研)

優秀プレゼンテーション賞
 (I-12) TwitterBOTのための食事画像の特定メニュー判定
 杉山 春樹・デシルヴァ, ガムヘワゲ チャミンダ・山崎 俊彦・相澤 清晴
 (東大)・小川 誠・佐藤 陽平・太田 龍督 (foo.log)

(C5-3) 触覚・視覚・聴覚における「生物らしさ」の周波数依存性
 ○高橋 康介 (東大/学振)・三橋 秀男・村田 一仁・則枝 真 (NEC)・
 渡邊 克巳 (東大/JST/産総研)

なお、プログラム委員会のほうで優秀と判断された数件の発表については、開催後に電子情報通信学会論文誌「情報・システム：D」でのシンポジウム推薦論文として査読が進められている状況である。招待講演としては、九州観光推進機構評議員会議長の中馬章一様からは「ユビキタス時代を迎えた観光宮崎の在り方について……これまでの国際イベント等から学んだこと」、株式会社しくみデザイン代表取締役社長の中村俊介様から「「体験」を拡張するー好体験で笑顔が広がるエンタメ・デジタルサイネージ」についてご講演頂き、ヒューマンコミュニケーション促進とその効用について貴重な経験談を伺うことができた。また、通常セッションのほかに企画セッションが2つ開催され、さらには飛び入り歓迎のライトニングトークがナイトセッションとして用意され、参加者の議論・交流を深める場として利用された。

HCGシンポジウム2011は、香川県高松市サンポール高松にて12月7日～9日の開催予定である。皆様からのご投稿、ご参加を期待したい。

最後にHCGシンポジウム2010開催にあたって多大なご支援を頂いた(財)みやざき観光コンベンション協会に、シンポジウム運営委員会としてここに謝意を表する。

FIT2010/MVE企画の開催報告

全 炳東 (千葉大学)、川本一彦 (千葉大学)

九州大学伊都キャンパスで開催された第9回情報科学技術フォーラム (FIT2010) の2日目の2010年9月8日にマルチメディア・仮想環境基礎 (MVE) 研究専門委員会主催のイベント企画「仮想社会と電子書籍—紙の本はなくなるか?」を開催しました。折悪しく台風が九州地区に接近し天候が心配されましたが、幸いイベント企画が開始される午後には天候も回復し、150名以上の参加者を得る盛況ぶりでした。

2010年は「電子書籍元年」と喧伝され、実際いくつかの電子書籍端末やそれに向けたサービスが市場に登場した年になりました。このような技術・市場動向をふまえて、本イベント企画では、書籍の電子化やそれを前提としたサービスなどに関連する最新動向を各分野の一線でご活躍の方々にお話しいただきました。講演題目と講演者は次のとおりです。

- ・「情報技術の宝庫：電子図書館」長尾 真 (国立国会図書館)
- ・「『連想×書棚』で知識の扉を開く」高野明彦 (国立情報学研究所)
- ・「Googleのデジタル書籍に関する取り組み」佐藤陽一 (グーグル (株))
- ・「インターネット環境下における情報鎖国の可能性」土屋 俊 (千葉大学)

まず長尾真館長からは、現在、国会図書館が進めている蔵書の電子化で必要とされる情報技術や、著作権法改正など書籍電子化を取り巻く社会情勢について講演していただきました。つづいて高野明彦先生からは、横断的なWeb検索を実現するための汎用連想計算エンジンGETAIについての技術的な解説とその展開について、神田神保町古書検索等を例に説明していただきました。佐藤陽一氏からは、Googleが進めているGoogleブックスの現状と今後の展開について説明していただきました。Googleの動向は国内外で注目されており、講演会後も聴衆の方々から活発な議論がされていました。土屋俊先生からは、書籍の電子化によって顕在化した出版業界の問題点についての鋭い指摘があり、あわせて今後の動向を展望していただきました。

会場には幅広い分野からの聴講者が集まり、熱心な議論に時間が経つのも忘れるほどでした。電子書籍への関心の高さを伺わせる雰囲気でした。

最後に講演者の方々をはじめ、参加して下さったすべての聴講者の方々に心より感謝するとともに、本イベント企画の開催にあたり多大なご支援をいただいたHCG関係者に謝意を表します。

発達障害支援研究会 (ADD) 活動報告
<http://add.shimane-u.ac.jp/>

委員長
長嶋祐二 (工学院大学)

■ADDとは

発達障害支援研究会 (ADD: Assistance for Developmental Disorder) が活動を開始してから2年が経過しようとしています。そこで、まずADDの設置経緯について説明いたします。

現在、発達障害児の支援は、その詳細な原因が未解明のため各地域での医療、療育、教育機関との連携で個々の子どもにあった発達支援方法を対症療法により模索している段階といえます。いくつかの医療や支援、教育機関を中心とした研究機関では、発達障害の原因究明、発達支援、教育支援などに関して、地道な研究が進行しています。工学系の研究者は、この研究テーマの重要性を認識しているのですが、認知科学、神経科学、言語学、福祉情報工学、コミュニケーション科学、教育学、ヒューマンインタフェースなど情報通信技術 (ICT) を駆使した分野として学際的な研究領域としての取り組みとしては、少数の研究者の参加に留まっているのが現状です。この原因の一つとして、学際領域として工学系の研究者が、どのように医療や療育、教育現場と連携したらよいかかわからないためと考えられます。また、地域や現場の連携で行われている医療や支援に関する知識、ノウハウが、広く他領域に公開され情報を共有する機会が少ないのもその原因と考えられます。さらに、発達障害の現場、この問題に関心のある研究者など、現場や研究、支援に関連する人たちが広く集まり、議論する場が整備されていないため、連携の模索すらできないのが現状と考えられます。

そこでADDでは、このような現状をふまえて、発達障害児 (者) の早期発見と適切な発達支援方法の確立を目指して、医療、療育、教育など診断や発達支援をしたりしている現場とHCGに参加する研究者とを融合した学術的発表と相互議論・交流の場を提供することを目的としています。

■ADDの活動のテーマ

ADDの取り扱う主なテーマとしては、発達障害、自閉症、注意欠陥多動性障害、アスペルガー、学習障害、視覚認知、聴覚認知、言語理解、神経科学、発達支援、学習支援などです。これらのテーマを医療、療育、教育分野とHCGの分野とでさまざまな視点から議論を行っています。

■これまでの活動

ADDの第1回研究会は、2009年5月23日に国立障害者リハビリセンターにおいて、発達障害とはどのような障害なのかを専門とともに議論することより開始しました。それから、大人の当事者との話し合い、ジャーナリスト、医療関係者、発達障害を専門とする研究者との講演会、議論の場を7回にわたり提供してきました。

